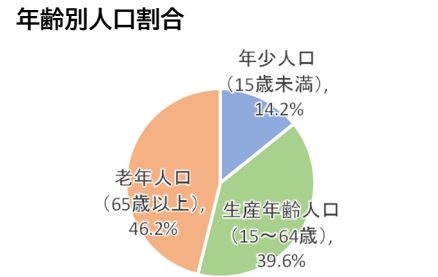
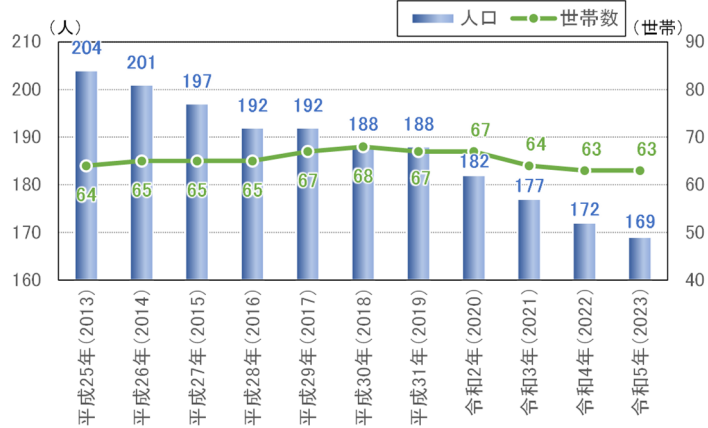


# 多子 (おいご)

人口・世帯数等 (令和5年4月)	
人口	169人
世帯数	63世帯
高齢化率	46.2%



## 人口・世帯数の推移 (過去10年間)



## 区域の概要

**立地** 集落の中を走る県道丸味温泉線を挟んで、標高300mの位置に、細長く家屋が散在する。集落の北側は山が迫り、南側から西側にかけて田畑が開ける。伝説として有名なくぐり池がある。

**地名由来** 「奥処(オキコ)」で山の奥をさす地名とも思われる。西日本では「奥」を「オイ」と呼ぶ所がある。『ひょうごの地名』(吉田茂樹著)

**歴史等** 「おいごむら」とも称した。集落の背後の尾根には戦国期の下津谷城跡、多子城跡があり、弘治3年(1557)の『但馬国にしかた日記』によると、城主は垣屋氏や田公氏の地侍であった河崎氏や北村氏と考えられる。

近世の多子村は、天正11年(1853)因幡国鳥取城主宮部氏領、慶長6年(1601)同国若桜藩領、慶長10年(1605)旗本宮城氏知行、寛永20年(1643)幕府領、寛文8年(1668)からは豊岡藩領となった。天保5年(1834)の『但馬国郷帳』(天保郷帳)の村高は232石余。特産物は但馬牛。

明治22年(1889)照来村の大字となり、昭和29年(1954)からは温泉町の大字となる。明治24年(1891)の戸数95、人口は男268・女256。

## これまで把握している文化財

文化財の件数 36件 (うち指定等文化財 0件)

大分類	中分類	小分類	把握件数	指定等					
有形文化財	建造物	建築物	0	3	0				
		石造物	0		0				
		工作物・その他の構築物	3		0				
	美術工芸品	彫刻	8	11	14	0			
		絵画	0			0			
		工芸品	2			0			
		書跡・典籍	0			0			
無形文化財		古文書・歴史資料・考古資料	1	0	0				
		音楽	0	0	0				
		演劇	0	0	0				
		工芸技術	0	0	0				
		その他の無形文化財	0	0	0				
		信仰の場	4	0	0				
		民俗文化財	有形の民俗文化財	祭具	0	5	0		
民俗文化財	民具	0	0						
民俗文化財	その他の有形の民俗文化財	1	0						
民俗文化財	無形の民俗文化財	年中行事・民俗芸能	1	4	9	0			
		民俗技術	0			0			
		食文化	0			0			
		民間説話・俗信	3			0			
		その他の無形の民俗文化財	0			0			
		遺跡	散布地・集落跡・生産遺跡			1	6	12	0
		遺跡	古墳・その他の墓			1			0
遺跡	城館跡・寺社跡	4	0						
遺跡	街道・古道等	0	0						
遺跡	戦争遺跡	0	0						
遺跡	その他の遺跡	0	0						
記念物	名勝地	山岳・高原・丘陵	0	0	0	0			
		海岸・海浜・島嶼	0			0			
		河川・滝・渓谷・湖沼	0			0			
		公園・庭園	0			0			
		その他の名勝地	0			0			
		動物・植物・地質鉱物	動物			0	6	0	0
植物	5	0							
地質鉱物	1	0							
文化的景観	生活・生業・風土により形成された景観地		1	0					
伝統的建造物群	宿場町・城下町・農漁村等		0	0					



清所神社



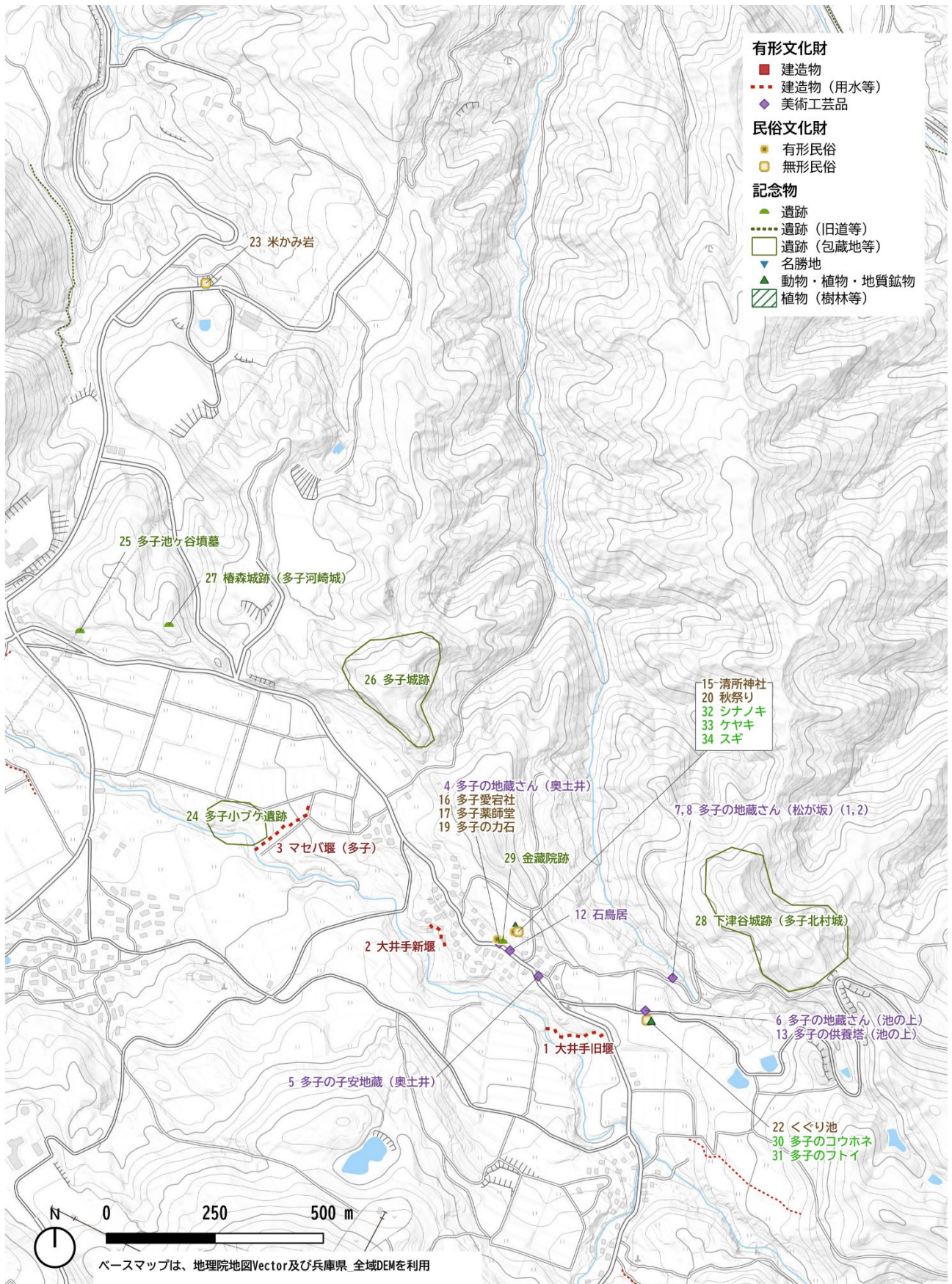
くぐり池



下津谷城跡・多子城跡

※人口・世帯数は住民基本台帳(令和5年4月現在)による。

文化財の分布



※所在地の掲載可能なものに限る



## 5-02 多子

### 文化財の一覧

#### ■ 有形文化財／建造物

分類	番号	名称	概要
工作物・ その他の 構造物	1	大井手旧堰	近世に築造された水路。水路延長 800m、灌漑面積 4.00ha。取入口は多子字奥之井、排水口は照来川。
	2	大井手新堰	近世に築造された水路。水路延長 1,400m、灌漑面積 9.40ha。取入口は多子中村 866、排水口は照来川。
	3	マセバ堰	近世に築造された水路。水路延長 700m、灌漑面積 3.00ha。取入口は多子字大木下、排水口は照来川。

#### ■ 有形文化財／美術工芸品

分類	番号	名称	概要
彫刻	4	多子の地藏さん(奥土井)	100×35cmの石像。薬師堂敷地内の一角にある。ほとんど完形である。
	5	多子の子安地藏(奥土井)	100×65cmの石像。村中の道路端に祀ってある。道路工事の際に少し場所を移動している。子育ての時期には必ずお参りするという。
	6	多子の地藏さん(池の上)	56×30cmの石像。村のかみから東に山道へ入ると伝説で有名な「くぐり池」があり、その道端にある。文化13年(1816)6月建立。建立年月と施主甚兵衛の名が刻まれている。
	7	多子の地藏さん(松が坂)(1)	石像。村のかみから北東に入ると滝があり、中腹に祠がつくられ、その中に祀られている。中央に「正一位高倉大明神」と記されている。
	8	多子の地藏さん(松が坂)(2)	不動明王の石像。村のかみから北東に入ると滝があり、中腹に祠がつくられ、その中に祀られている。
	9	多子薬師堂の薬師如来像	88×50cmの木像(坐像)。村の真ん中あたりにある薬師堂に祀られる。寛政2年(1790)8月再建、イゲのカラン堂(観音堂)から移転したもの。明治13年(1880)、昭和33年(1958)にも再建。
	10	多子薬師堂の木像	28×25cmの木像。村の真ん中あたりにある薬師堂に祀られる。傷みがはげしい。
	11	多子薬師堂の不動明王像	68×30cmの木像。村の真ん中あたりにある薬師堂に祀られる。文化年間(1804~1817)当時松尾村宝城寺より譲り受けたもので、その後修復された。傷みがはげしかったため、平成13年(2001)11月に再度修復された。
工芸品	12	清所神社の石鳥居(1930年建立)	昭和5年(1930)に再建されたもの。県道265号線に面して建つ。
	13	多子の供養塔(池の上)	村のかみから東に山道へ入ると伝説で有名な「くぐり池」があり、その道端にある。「奉納大乘妙典 大社仏閣巡拝」の文字が刻まれている。
古文書・ 歴史資料・ 考古資料	14	清所神社の棟札	天文4年(1536)、元文元年(1736)の社殿再建棟札が残る。

#### ■ 民俗文化財／有形の民俗文化財

分類	番号	名称	概要
信仰の場	15	清所神社	祭神は素戔鳴命、天津児屋根命、天太王命。創立年月は不明であるが、出雲大社より分霊を勧請し牛頭天王と称した。山名家3代民政の家老下津屋安芸守取次して北村兵庫助より熊鷹を献じたことがある。明治6年(1873)10月に村社となった。境内社には稲荷神社(保食命)、八坂神社(素戔鳴命)がある。
	16	多子愛宕社	清所神社境内に位置する。石造の塔(石造の基壇の上に小祠を祀る)で、火防の神として祀られている。

分類	番号	名称	概要
信仰の場	17	多子薬師堂	文化9年(1812)3月建築。柱・土台は総ケヤキ造りで、16坪(4間×4間)。かつては茅葺で、堂普請によって毎年屋根の修理を行っていたが、昭和30年(1955)にトタン葺に、平成24年にはガルバリウム鋼板に改修された。以前は、通称イゲの高台、カラン堂(観音堂)があり、現在の場所に移転したもの。堂内には薬師如来像、観世音菩薩、不動明王等が安置されている。かつて祀られていた観音像は、昭和45年(1970)頃に盗難に遭い、平成13年(2001)に新調されている。
	18	多子の籠堂	籠堂は古くからあったとされるが、昭和16年(1941)3月の火災により焼失し、同年7月に再建された。木造トタン葺の平屋建(4.5間×3間)。平成6年(1994)9月に屋根のトタン張替え、内装の改修を行っている。
その他の有形の民俗文化財	19	多子の力石	薬師堂の広場にかつて区の集会所(明治30年(1897)頃の建築)があった。広場には65kgと75kgの2つの力石があり、若者が力試しをしていたという。

#### ■ 民俗文化財／無形の民俗文化財

分類	番号	名称	概要
年中行事・民俗芸能	20	清所神社秋祭り	10月1日に行われる。
民間説話・俗信	21	かっぱの手紙	※『但馬・温泉町の民話と伝説』(昭和59年、喜尚晃子編纂、手鞠文庫発行) p94 参照
	22	くぐり池	※『温泉町郷土読本』(昭和42年、温泉町教育研修所調査部編集) p233 参照 ※『村の記録 おいご』(平成17年、多子区編集・発行) p37 参照 ※『照来考』(宮脇崇一原著・宮脇直一編集) 参照 ※『但馬・温泉町の民話と伝説』(昭和59年、喜尚晃子編纂、手鞠文庫発行) p46 参照
	23	米かみ岩	※『但馬・温泉町の民話と伝説』(昭和59年、喜尚晃子編纂、手鞠文庫発行) p159 参照

#### ■ 記念物／遺跡

分類	番号	名称	概要
散布地・集落跡・生産遺跡等	24	多子小ブケ遺跡	圃場整備で縄文～平安時代の土器が出土。消滅。
古墳・その他の墓	25	多子池ヶ谷墳墓	宝篋印塔のある丘(平野の大墓)に、長さ5.3m、幅約2.5mの墓壇(弥生時代の墳墓)が検出されたが、道路工事で消滅。
城館跡・寺社跡	26	多子城跡	中世の城館跡。本来3つの曲輪からなり、主郭周辺を帯曲輪で取り囲む縄張りであったものと思われる。戦国末期になって大改修したものである。城は小規模で地侍クラスの城郭であるが、縄張りの的には優れている。城主は河崎氏とされ、戦国末期に垣屋豊統や田公氏の影響下で「繋ぎ城」として重点的に改修を受けたものと推察される。
	27	椿森城跡(多子河崎城)	多子の北方椿森の山上平地にあり、河越石見守の居城であったという。この石見守は永正5年(1504)の死亡というので、戦国時代の人と思われる。詳細は不明であるが、多子城の一砦であったかもしれない。
	28	下津谷城跡(多子北村城)	中世の城館跡。小規模な曲輪群の広がりから、南北朝期に築城起源があると思われるが、特に戦国期に補強・改修されている。城主は地侍層の中村氏・北村氏とされる。地侍クラスの城郭が詰城と居館のセット関係で残る良好な遺構である。

## 5-02 多子

分類	番号	名称	概要
城館跡・ 寺社跡	29	金藏院跡	かつて現在の薬師堂前にあった。この金藏院には、桧尾村の宝城寺の宝物、鐘馗大神乗馬の板木（標家納札）を譲り受け、所蔵していたが、その後、如何になったかは不明である。金藏院には修験者（山伏）が長年居住していたが、その後朽ち果て、墓体は字林ノ首にある。

### ■ 記念物／動物・植物・地質鉱物

分類	番号	名称	概要
植物	30	多子のコウホネ	概要不明
	31	多子のフトイ	概要不明
	32	清所神社のシナノキ	シナノキは、『大和本章批正』によると和産の菩提樹とあり、寺院によく植えられる。但馬地方には天然にも分布し、ヒルカワの方言名（俗称）で呼ばれる。古来、この樹の皮で繊維をとり、布や縄、漁網に利用したことからこの名がある。樹高 35m、幹回り 3.9m。
	33	清所神社のケヤキ	樹高 25m、幹回り 5.1m、根元回り 9mにおよび、境内を制する勇姿は見事である。長年の風雪のため、地上数mのところ折損痕をもつ。
	34	清所神社のスギ	清所神社境内にある。樹齢数百年と思われるスギ。
地質鉱物	35	照来盆地	「照来米」「但馬牛」「照来清水」など、地質、地形、水質などの恩恵を受け、歴史、食などが豊富に存在する。

### ■ 文化的景観

分類	番号	名称	概要
生活・生業・ 風土により 形成された 景観地	36	照来盆地の棚田	地すべり地の緩斜面を利用して拓かれた棚田。

### 自治会の区域における歴史文化・文化財の記録作成等の取組

・『村の記録 おいご』（平成 17 年 3 月、多子区編集・発行）

